

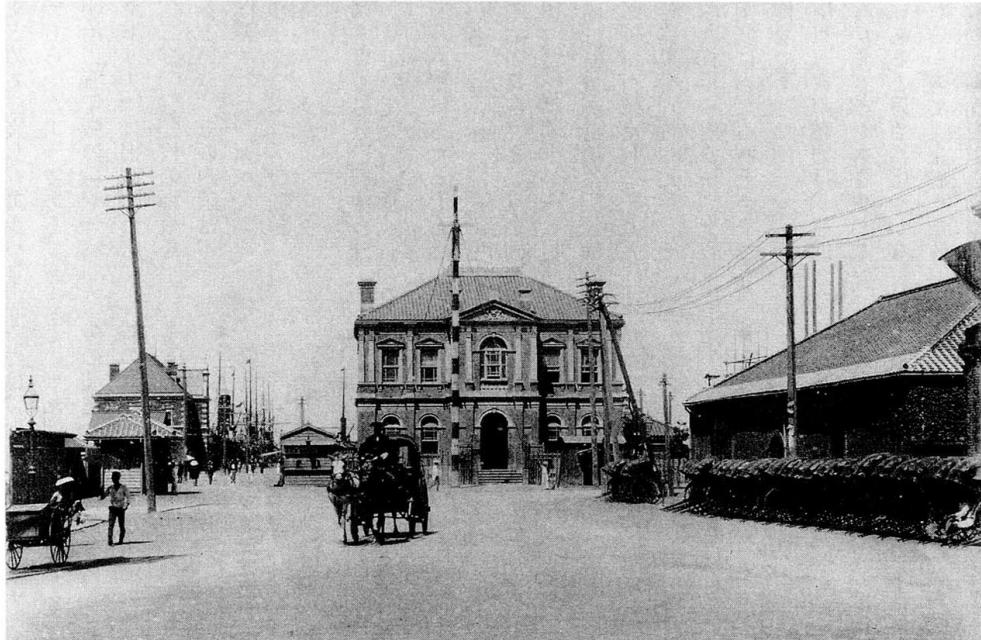
NEWS

# 開港のひろば

編集・発行／横浜開港資料館  
〒231-0021 横浜市中区日本大通3番地 電話(045)201-2100  
ホームページ <http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

Number  
**72**

発行日／平成13年4月25日(水)  
印 刷／中川印刷株式会社



横浜港桟橋入口 金幣アルバムより

## 企画展 明治のハイカラ写真館 一日下部金兵衛とその世界一



金幣写真館 本町1丁目時代の建物。明治23年頃から大正3年に引退するまでここで営業していた。  
フリーダ・サンジオ氏寄贈

日下部金兵衛（くさかべ・きんべえ）といつても今ではほとんどの人がご存じないであろう。しかし、明治時代には横浜でトップ・クラスの写真館の経営者として知られ、金幣（KIMBEI）の商号は世界に名を轟かせていた。

天保一二年（一八四一）甲府の商家に生まれた金兵衛が、写真家として大成するきっかけは、幕末の横浜に出てきて、当時世界的に見てもハイレベルの写真家、イギリス人フェリックス・ベアトの助手となつたことである。

写真館の仕事をの中心が肖像写真や記念写真の撮影であることは、今も昔も変わらない。しかし、幕末・明治の横浜の写真館には、それ以外のビッグ・ビジネスがあった。それは、日本の名所風景や日本人の風俗習慣

平成七年一月一七日、今度は金兵衛の遺品を守りながら芦屋で生活していた金兵衛の曾孫たちを阪神淡路大震災が襲つた。住宅は被害を受けたが遺品は無事だった。昨年、遺品は、曾祖父が活躍した横浜で永久に保存したいという金兵衛の曾孫、フリーダ・サンジオさんの意向により、すべて横浜開港資料館に寄贈された。

今回の展示では、所蔵資料と寄贈を受けた遺品や関係資料を組み合わせ、金兵衛の生涯を紹介するとともに、彼が写した明治時代の日本人と、その生活の舞台であった町や村の光景を振り返る。

（斎藤多喜夫）

を写真にとり、手彩色を施してアルバムに仕立て、外国人に販売することであった。これらは「横浜写真」と称されるようになる。

金兵衛は明治一四年までに弁天通二丁目三六番地で開業、二三年頃、開港記念会館の右隣り、目抜き通りに面する本町一丁目七番地に移転する。この頃横浜写真は全盛期を迎えていた。KIMBEIの商号が欧米諸国で喧伝されたものこの頃である。横浜写真業界のリーダーとして活躍した金兵衛だが、大正三年（一九一四）に引退、娘マツの婿、小川佐七が事業を継承した。

# 企画展

## 一横浜写真の旗手— 日下部金兵衛の世界

### 金兵衛の写した横浜風景

横浜写真を製作していた大手写真館では、各種のネガを取り揃えておき、顧客は見本帳から好みに応じて五〇枚程度まとめて注文し、アルバムに仕立ててもらつたようである。

金兵衛が明治二五年版の『ジャパン・ディレクトリー』に掲載した広告によると、二、〇〇〇枚の種板を所有しているという。その内訳は、ほぼ同じ頃作製されたカタログ（神戸市立博物館所蔵）によって知ることができる。

横浜の部はネガ番号五〇一から五八七まで、計八七点からなる。当館ではそのうち八六点にあたる七五点を所蔵している。一年前、「着色写真に見る明治の日本」という企画展示に合わせ、『彩色アルバム・明治の日本—横浜写真の世界』（横浜開港資料館編、有隣堂刊、一九九〇）という写真集を刊行したが、そこに収められた横浜の写真一二七点のうち、四割弱にあたる四七点までが金兵衛の作品であった。

金兵衛の風景写真的魅力は、遠近法を利かせながらバランスを失わない画面構成にあると思う。広やかな眺望が得られる一方で、主題となる建物や点景人物が画面を引き締めている。

### 金兵衛の写した明治の人びと

風俗習慣の部はネガ番号一から四〇六まで。当館ではこのうち確かに

もので一〇六点（二六部）、推測を加えると一五四点（三八部）所蔵している。

これらの写真はおおまかにいって、三つのタイプから成り立っている。一つは、街角で拾ったスナップ写真といった性格のもので、もちろん多少の演出や誇張はあるにしても、当時の人びとの実際の生活の様を伝えるものであり、歴史資料としての価値も高い。

二つめは両者の中間のようなもので、「お座敷写真」ともいべきもの。その大半は芸者をモデルとしている。歌舞音曲を主題としたものである。被写体自身が人前で芸を披露するの。歌舞音曲をする芸者であることもあって、自然な動きの感じられる傑作が多い。

◆日下部金兵衛  
フリーダ・サンジオ氏寄贈



▶お座敷写真の傑作  
「鼓を打つ」 金幣アルバムより



横浜元町 金幣写真館製作幻灯板写真

主題別みると、「職業尽くし」と「美人もの」の二種類が大半を占めている。前者は、都市では店先や行商・職人・人足など、農村では野良仕事や養蚕・製茶の作業風景など。僧侶や神官・巫女・行者・巡礼など、信仰に関係するもの、人力車夫や駕籠かき・馬子・船頭など運送に關係するものも、職業尽くしのヴァリエーションとみることができよう。この

タイプにも演出写真が含まれるけれども、やはり野外でのいわば「実景写真」に、金兵衛ならではの味わいのある作品が多く、歴史資料としての価値も高い。

職業尽くしのモデルは大半が男性であり、肉体労働を扱ったものも多い。いわば男は逞しさを、女は美しさを強調しつつカメラに収まり、その写真を外国人に売つて外貨を稼いでいたわけである。

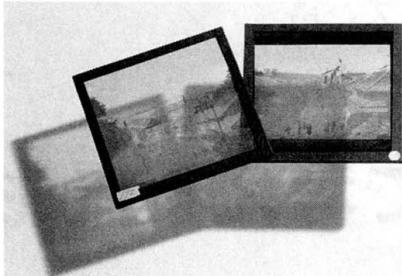
「美人もの」には演出写真とお座敷写真の両方がある。後者の芸者をモデルとする芸事の写真是、職業尽くしの一部でもある。炊事・洗濯・飲食・裁縫・化粧・入浴、あるいは生花・茶道など、生活の場を設定して撮影されたものも多く、日本の生活習慣を伝えるモチーフとセットになつていている。

### さまざまな形態の写真

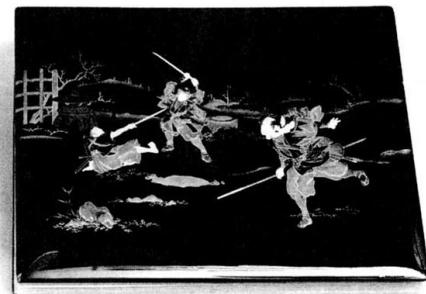
金兵衛が活躍した時代は、写真技術のうえからいと、ネガには依然としてガラス板が使われていたが、湿板から乾板に移行していた。今日伝わる作品のネガは乾板だと考えられるが、残念ながらその実物は残されていない。乾板のほうが持ち運びに便利で、露光時間も短いので、野外撮影に適しており、金兵衛のスナップ写真の傑作もこれによって生まれたのであろう。写真を感光膜が塗布される物質（「基体」と呼ばれる）によって分類すると、紙・ガラス・布の三種類になる。



絹団扇写真



幻灯板写真



紙というのは、いうまでもなく印画紙のこと、金兵衛の時代には、塗布材に鶏の卵を混ぜることから鶏卵紙と呼ばれる印画紙が用いられた。黄ばんだ生地に特徴がある。バラ売りもあったと考えられるが、多くの場合五〇枚、まれに一〇〇枚、二〇〇枚の単位でアルバムに仕立てられた。印画紙は日本絵具で彩色されたうえ、一枚一枚厚紙に張り付けられ、豪華な表紙を付けて製本された。これらはすでにベアトが行っていたことだが、螺鈿細工を施した蒔絵の表紙は、今日知りうる限りでは、金兵衛の製作になるものがもっとも早いようである。

このように、横浜写真アルバムの製作には、写真家のみならず、絵付師・経師・蒔絵師・螺鈿細工師らの手が加えられていた。したがって、当時の大手写真館は、スタジオのはかに、かなりの規模の工房を付属させていた。横浜写真は、写真という舶来技術と絵付などの伝統技術が組み合わされて成り立っていたわけであり、輸出用美術工芸品の製作という性格をも持っていたのである。

当館では金幣写真館の印のあるもの三冊、印はないが大半かすべてが金兵衛の作品からなるもの三冊のアルバムを所蔵している。このほかに、内容はほとんど金兵衛の写真だが、小川佐七の印のあるものが一冊ある。娘婿の小川佐七がネガを含めて金幣写真館の事業を継承したことを証拠立てる興味深いアルバムである。

画紙のこと、金兵衛の時代には、塗布材に鶏の卵を混ぜることから鶏卵紙と呼ばれる印画紙が用いられていた。黄ばんだ生地に特徴がある。バラ売りもあったと考えられるが、多くの場合五〇枚、まれに一〇〇枚、二〇〇枚の単位でアルバムに仕立てられた。印画紙は日本絵具で彩色されたりうえ、一枚一枚厚紙に張り付けられ、豪華な表紙を付けて製本された。これらはすでにベアトが行っていたことだが、螺鈿細工を施した蒔絵の表紙は、今日知りうる限りでは、金兵衛の製作になるものがもっとも早いようである。

ガラスというのは幻灯用に作られるもので、英語では「Magic Lantern Slide」という。五〇枚単位で箱に入れて販売されることが多い。解像度も高く、生地も透明で、鶏卵紙より画質はすぐれている。金兵衛はこの分野でも第一人者であった。



演出写真「人力車の転倒」書割が右の絵とよく似ている



金兵衛が晩年に描いた絵（絹本）フリーダ・サンジオ氏寄贈



職業尽くしの写真「大工」（部分）

横浜ではこれ以外にも、さまざまな材料に写真を焼き付けることが試みられた。鈴木真一の陶器、金兵衛の絹、水野半兵衛の金蒔絵などである。今回寄贈を受けた資料のなかに、綱に焼き付けた写真が多く含まれており、当館で収集した絹団扇写真とともに、なるべく多く展示したいと

あたりで独立したユニークな経歴の持ち主で、近年注目されつつある。二四年に金蒔絵写真で特許を取得している。寄贈を受けた写真は、その水野が金兵衛に師事していたことを推測させるものとして興味深い。寄贈を受けた金兵衛のプライベートな写真帳に水野の肖像が含まれること

思っている。また、寄贈を受けた資料のなかに、水野半兵衛が金兵衛の写真を金蒔絵に焼き付けた珍しい写真がある。水野は最初横浜で修業し、明治三年に郷里の静岡で開業、一八年には再び横浜に来てファルサーリ商会の創業に参画、二〇年頃現在の日の出町の

## 晩年の金兵衛

絵を描くことが晩年の金兵衛の趣味だったらしく、寄贈を受けた遺品の中には、屏風や軸に仕立てられた日本画が何点か含まれている。それは洋風の日本画ともいいうべきもので、彩色や製本によって和風に仕立てられた舶来の写真と好一対をなしている。金兵衛はまた謡曲を嗜む趣味人でもあった。日本の伝統的な文化や技術を舶来の洋風文化と巧みに組み合わせるところに、明治時代の文化の特色があり、それが単なる「西洋かぶれ」とは異なる「ハイカラ」の意味だったのではないか。

ドイツの宗教改革者マルティン・ルターの末裔にあたるというハインリッヒ・ルターの長男、内田路多（フランク・ルター）と結婚した孫娘のたまやその子供たち、ヨーロッパ系アジア人（Euro-Asian）の曾孫たちに囲まれながら、端然と中央に座す和服姿の金兵衛を写した晩年の写真をみると、ベアトの助手から始まって、和洋両様の文化のなかを生きてきた明治のハイカラ文化人としての相貌がよく伝わってくる。

金兵衛は明治一八年、横浜海岸教会で洗礼を受けたクリスチヤンだつた。葬儀は昭和七年四月、芦屋の教会で行われたが、京浜地区在住の親族の手で海岸教会でも行われた。

（斎藤多喜夫）

# 電話ボックスで考える撮影年代



山手ゲート座前

前回の企画展示「追憶の横浜—絵葉書に見る百年前の人びとと風景」展では、様々な角度から、絵葉書を歴史資料として読み解くことを課題としていた。その一つが年代推定であるが、一般的には建物・橋などの建造物を年代測定の鍵とする。しかし絵葉書には、たとえば市電の車体の型、電信柱の張り紙、商店の看板など様々なヒントが隠されている。その中で注目したいのが公衆電話ボックスである。

横浜に公衆電話が登場したのは、一九〇〇年のことである。当時は「自動電話機」と呼ばれ、はじめは横浜停車場、平沼停車場、大桟橋、吉田橋際、亀ノ橋際の五カ所に設置された。その後、年を追うごとに設置場所が増えていく。

『横浜市統計書』には、「市内自動電話機通話度数及料金」の統計が毎

年掲載されており、そこから設置場所の変遷をまとめたのが下表である。一九〇一年度までは五カ所で、一九〇二年度に十一、一九〇七年度に一四というよう、設置数と設置場所は頻繁に変わった。新設される場所もあれば、廃止される場所もある。そこでこの電話ボックスを撮影年代推定の鍵にできないかと考えたのである。

電話ボックスは人の集まるところに置かれる。したがってその設置と廃止は街の賑わいの変遷を映すとも言えよう。表中の一九一三年度に見える「横浜税関繫船岸壁際」とは新埠頭をさすが、完工前年から電話ボックスが設置され、この付近に人の流れが生じたことが推察される。また一九一五年には高島町に二代目横浜駅が開業し、平沼停車場が廃止となるが、電話ボックスの改廃からその動きがたどれる。

さて、図の絵葉書で右手に見えるのがゲート座、山手公会堂とも呼ばれた。その向かいに電話ボックスが写っている。これは表の一九〇二年度に現れる「山手本町公会堂前」である。〇五年度に名称が「山手町英國海軍病院前」と変わるが、電話ボックスの左手に建つのが海軍病院である。したがってこれは名称変更であつて、設置場所の変更ではない。「山手英國海軍病院前」が消えるのは、一九〇九年度のことである。したがつて、この写真的撮影年代は、一九〇二年四月から一九〇九年三月までの間と推定されよう。

(伊藤泉美)

横浜市内公衆電話設置数と設置場所の変遷（1901年度～1920年度）

年度	設置数	設置場所	廃止場所
1901	5	横浜停車場内、平沼停車場内、吉田橋際、元港務局前（大桟橋）、亀ノ橋際	
年度	設置数	新設場所・名称変更 *1902年度からは全設置場所ではなく新設場所を記載。	廃止場所
1902	11	日本波止場際、山手本町公会堂前、雪見橋際、賑町1丁目角、野毛町3丁目角、神奈川停車場	
1903	11	変更なし	
1904	11	名称変更：元港務局前→横浜税関西波止場際	
1905	11	名称変更：山手本町公会堂前→山手町英國海軍病院前	
1906	11	変更なし	
1907	14	南仲通3丁目角、永楽町1丁目角、根岸監獄署前	
1908	15	長者町9丁目角	
1909	16	北方町境町巡回派出所前、横浜公園内	山手町英國海軍病院前
1910	18	豊國橋、末吉町6丁目	
1911	18	変更なし	
1912	17		根岸監獄署前
1913	19	横浜税関繫船岸壁際、東神奈川停車場前	
1914	19	変更なし	
1915	19	滝頭、長島町5丁目 名称変更：横浜停車場内→桜木町駅前	南仲通3丁目角、末吉町6丁目
1916	20	横浜停車場内（2代目）、南吉田町日本橋際、本牧電車終点 名称変更：吉田町1丁目角→吉田町1丁目川岸	平沼停車場内、長島町5丁目
1917	21	神奈川遊廓大門前	
1918	21	本町5丁目、千代崎町、戸部町4丁目、尾上町公園、馬車道通	日本波止場、北方町境町巡回派出所前、雪見橋、横浜公園内、豊國橋
1919	23	扇町1丁目花園橋際、扇町5丁目扇橋際	
1920	23	変更なし	

\*1911年度～1915年度は臨時特設電話有り（設置場所は不明）

典拠：『横浜市統計書』第1回（1903年刊）～第19回（1922年刊）

# 『橘樹郡公報』

## 一大正期・郡役所の広報紙

現在では地名としてわずかにその痕跡を留める「郡」が、明治・大正にわたる約半世紀もの間、市町村と並んで地方行政の一翼を担っていたことは、あまり知られていない。明治十一（一八七八）年に郡区町村編制法が制定され、府県—郡区—町村の地方体制ができた。郡には郡役所が置かれ、官選の郡長のほか、数名多いときで十数名の郡吏員があり、国・府県からの布達を町村に伝達し、町村の指導監督にあたった。また明治二十三年の郡制制定後は、郡の議決機関として郡会が新たに設置され、郡は自治体としての性格をもつようになつた。つまり各町村から郡會議員が選出され（制限選挙）、単なる町村の指導監督機関の枠を越えて、郡財政にもとづく郡独自の行政事務を執行することが可能になつたのである。

神奈川県では郡区町村編制法を受けて、横浜区の他に西多摩・南多摩・北多摩・都筑・橘樹・久良岐・鎌倉・三浦・高座・愛甲・津久井・大住・淘綾・足柄上・足柄下の十五郡が置かれたが、明治二十六年の多摩三郡の東京府編入、同十九年には大住・淘綾の合併（中郡）により、以後十郡となつた。さらに郡制の施行は明治三十二年とやや遅れた。現存する郡役所の公文書（神奈川県立公文書館蔵）は、震災・戦災などのために必ずしも豊富とは言えない。しかし橘樹郡・中郡などで発行された「郡公報」の存在は、未だ不明な部

分の多い郡行政の実態や、郡内各町村の態様を僅かながら照射してくれるので、ここでは大正初期の橘樹郡（現在の横浜市北東部及び川崎市にほぼ相当する地域）で発行されていた『橘樹郡公報』を紹介する。

### 『橘樹郡公報』

『橘樹郡公報』の初刊は、大正三年（一九一四）年四月十五日、発行主体は神奈川県橘樹郡役所。発刊当日に出された郡告示第七号「橘樹郡公報發行手続」第一条によれば、

郡公報は毎月一日十五日の二回に発行す、発行定日にして大祭

日、其他休暇に該当する時は其翌日発行し臨時急設を要するものある時は其時々別に号外を發行す

とある。さらに第二条「郡公報」に掲載すべき事項として、郡令・郡告示・郡告諭・郡達・郡訓令・辞令・一般通牒・廣告などと並んで、「彙報」があり、

賞、兵事、戸籍、産業、土木、地理、学事、衛生、収税、雑事等の各項に區別し之れを掲ぐとされていた。

『橘樹郡公報』は、大正四年三月（一日号のみ）・四月（十五日号のみ）を除いて毎月一回発行され、現在のところ同年九月十五日発刊の三十三号までが確認されている（終刊か否か現在のところ不明である）。A五判サイズで、少ない時で八ページ、

多い時で十六ページにのぼる時もあり、郡会議員など、郡内の重立ちは、領布されたようである。

### 『橘樹郡公報』の語るもの

『橘樹郡公報』を通読していると、同時に刊行される『統計一覧』には記載されないような細部の統計資料に出くわすことがある。その一例として大正四年八月の壮丁教育調査の資料（『橘樹郡公報』三十二号）大正四年九月一日を紹介しておく。

これは明治三十八年に文部省が実施を各府県に奨励した、高等小学校卒業以下の壮丁にかかる教育程度・学力程度の調査である。橘樹郡では郡下十九ヶ町村の九三一名のうち、二十八名が高等小学校卒業者、一八〇名が高等小学校二年生、三八三名が尋常小学校卒業者で、義務教育修了者は合計で七八一名（八三・九パーセント）とされる。次に国語・算術について学力調査の結果、優良な成績（甲）を収めた町村上位五町村を並べると、次のようになる。

国語 稲田村、橘村、旭村、

算術 橘村、稻田村、田島村、

宮前村、日吉村

郡の自治を発達せしめるには郡民が自治の民として自覚するこ

とが必要である：それには、先づ我々が如何なる仕事を為しつゝ

あるか、我々の協同の力が何處まで及んで居るかといふことを

知つて置く必要がある

と、郡在住者（郡民）に向けて郡行政の周知を図る必要性を説いてい

る。『橘樹郡公報』もやはり、これと同一の目的のもとに刊行されたであろうことは推測に難くない。

【追記】『橘樹郡公報』は「飯田家文書」（神奈川県立公文書館蔵）や川崎市高津区在住の岡野洋貴氏所蔵文書中にその所在が確認されている。

当館では来年一月から近代の橘樹郡を主題にした企画展示を予定しており、銳意、資料調査に努めているところである。郡関係の古い資料をお持ちの方は、是非御一報下さい。

このほかにも、果実八品・蔬菜類

三十七品の作付反別・収穫高・栽培町村など、郡南部への工場進出などで次第に産業構造を変容させて行く当時の橘樹郡を知る上で、不可欠の資料が含まれている。

### 郡政周知策としての『橘樹郡公報』

『橘樹郡公報』とほぼ同時期に橘樹郡施設事業の概要」という、橘樹郡及びその関連団体が展開している教育・土木・地方改良・勧業・郡の財政などを簡潔に記した小冊子が刊行されている。その序文で郡長・市村慶三は、

# 野沢屋支配人 金兵衛の「年頭廻り」(2)

信州上田周辺で

前回(1)では明治九年（一八七六

五月六日「年頭廻り」の旅に出た野沢屋の鐸木金兵衛の信州佐久・上田での行動をふりかえた。金兵衛は生糸・人参荷主である信州佐久の得意先の諸家や村々をたずねたのち、上田で為替会社＝彰真社の開業準備を確認したのである。

信州上田の生糸改会社に出向いた五月一八日、金兵衛は橋詰菊次郎という者を従者として雇った。そして二〇日より真田・金剛寺・堀などの上田周辺各村の得意先を廻っている。その間、上田の「曰」（符号）を宿所とする場合もあれば、得意先に泊する場合もあった。昼食は「船田村喜多十様ニ而御馳走ニ相成」と得意先からふるまわされるときもあった。二三日宿所の「曰」での出立直前横浜からの手紙を受け取った金兵衛は、近郊の塩尻からはじまり、戸倉・坂木・矢代・稻荷山をはじめとする各村を廻った。途中姥捨山の畠観を楽しみつつ、夜長野に到着した。翌二四日「これまたなりゆき」は是迄成行浜へ出状」と手紙をしたため、「正午御堂へ参詣（善光寺）。従者の菊次郎とともに髪を結い直している。午後三時から要田・高田へ向かい、青木金平なる者からは「店并ニ栄吉様へいろいろ事伝有」と横浜本店と栄吉（野沢屋勤務か）への言伝を依頼されている。

これにより作業が糸を繰るという局面に集中することになり、生糸の品位・能率ともに飛躍的に高まる基礎環として建設された群馬県の官営富岡製糸場は著名である。

中野製糸場は、授産事業として中野町とその周辺の有志によって出願され、明治六年（一八七三）八月に操業を始めた。動力は水力。その前年に政府の御用をつとめ、長野県の為替方になった豪商小野組が始めた深山田製糸場とともに県下器械製糸の鼻祖と呼ばれる。翌七年中野製糸場は設備を二〇〇人取りとして、富岡製糸場・二本松製糸場（福島）とともに全国屈指の設備規模となつた。のちに日本の製糸業をリードす

ここで登場する「ヰカイ場」は中野製糸場である。江戸時代の座繰製糸は、繰なべで繭を煮て、数粒の繭から出た糸を左手の指で縫りをかけて一本にし、右手で糸車を回転させて巻き取るという家内工業であったが、器械製糸は当時は水力・人力に動力を求めていたので、糸車を回転させる作業を製糸工程から解放した。これにより作業が糸を繰るという局面に集中することになり、生糸の品位・能率ともに飛躍的に高まる基礎となつた。政府の殖産興業政策の一環として建設された群馬県の官営富

段階では、須坂が  
の夜も夜中の  
田切両人と  
致し」とし  
須坂では器械  
たのである  
二七日は、  
り、矢代で  
朝六時に出  
「曰」にもじ  
成行出状横  
せへも出ス

二七日は須坂・松代の得意先を廻り、矢代で一泊。翌二八日は矢代を朝六時に出立して、十一時には上田城へもどった。そして「是足らず」にもどった。

松本・伊那から高山・岐阜へ

ることとなる諏訪の器械製糸はいま  
だ勃興する以前にある。

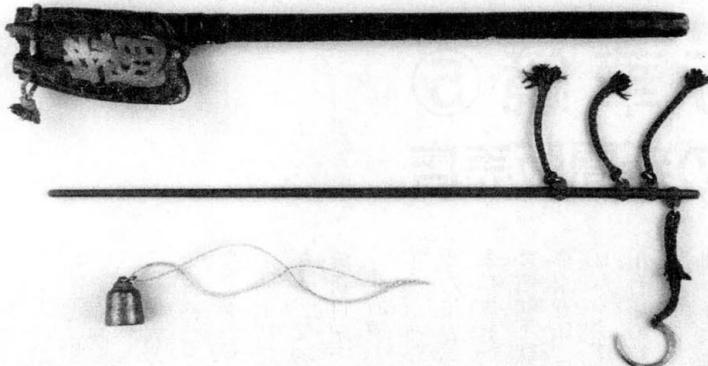
翌二六日の記述をみると、金兵衛  
は小布施をまわって須坂に入り、  
「糰屋」だけ立ち寄って同店の「キ  
カイ場一見」した。この「糰屋」は  
七〇人取の当時須坂最大の規模を誇  
る小田切武兵衛・同豊太郎らによる  
器械製糸場をさしている。明治九年  
段階では、器械製糸の勃興は中野と  
よりも須坂が顕著であった。そしてそ  
の夜も夜中まで宿所に訪ねてきた小  
田切兩人と「キカイ」の咄しこまく  
致し」としていることから、まさに  
須坂では器械製糸の話題が盛んであつ  
たのである。

金兵衛は忙しい。六月六日飯田を発ち、険しい三里の大平峠を越えて木曽路に。妻籠宿大野屋孫右衛門に投宿。七日は大雨、妻籠から七里半の位置にある恵那郡付知村を「追々まいり」つつ、夜は同村農家三尾慶三郎方を頼み宿とした。翌八日は恵那郡・益田郡をへだてる両国峠を越え、途中下呂の温泉に立ち寄り、一

二里を歩いて島尻村へ。翌九日はおそよそ八里を歩いて飛騨高山の長瀬屋へ。「高山近在ハ昨今漸々蚕ハキヲロシ尤田ノ植付ニ而種ヲカコイ置由」と、高山周辺は田植えと蚕の飼育時期がぶつかるため、蚕飼の開始が遅いと金兵衛は分析している。

六月十日、金兵衛は飛騨高山の糸  
師（糸商）の訪問を高山生糸改会社  
総代の小森文助の指図をうけて開始。  
小森からは「為替金八分之割合位ニ  
貸渡吳様御咲有之」と生糸を出荷す

三日は塩尻を発して伊那街道を南  
た。



鐸木實家に残るてんびん秤。

今回の道中でも金兵衛の腰にあったものであろうか。

る荷主への資金の融通を約束させられ、その夜は盛大な歓迎の宴がもたれた。翌十一日小森方を訪問し、高山周辺の生糸の集荷を生糸改会社に依頼することとし、正午「キカイ場拝見」。のち「日下部、山清、長瀬御三人同道ニ而、横半、堅仁、山清、亘佐、向町、南部や」の器械製糸場を見学した。当時高山では器械製糸が次々と勃興する時期にあたっていた。十二日高山を辞す金兵衛は、先日の宴会の連中に礼を述べ、従者としてつれてきた菊次郎を上田に返し、南下して岐阜に向かった。その日は高山生糸会社で「大寄合」がある予定で、生糸出荷の形態として、帶印紙がよいか、「壱スガ毎二巻」くか、横浜に帰り次第返事をすること、との備忘を日記に記している。

金兵衛が岐阜に入ったのは六月十四日である。早速「岐阜店廻り」、早糸の出回りを確認する。「油嘉殿」訪問し、同人同道で糸屋仲間を訪ねる。夜は鰯飯の御馳走で糸屋仲間の集会に出席した。翌十五日は「山勘様方」に行き、長良川で船遊び。金兵衛の年頭廻りも終わりに近づいていた。十六日は

「糸忠」と数軒の得意先を廻ったものの、松半という料理屋で食事をとり、さらにスッポンとウナギを食した。また花角なる寄席で染太夫の語りを聴いている。

### 帰浜の途に

金兵衛が岐阜を出立し名古屋に向かつたのは、六月十七日である。道中のさまざまなことが心の中に去来したことであろう。なんといっても強行軍である。多くの得意先訪問。山道を一日十里以上踏破する日もあつた。製糸家・糸屋仲間との宴会も楽しかしそれは仕事の上でのこと。十七日金兵衛は、名古屋見物をし、熱田神宮に参詣した。その夜は伊勢屋久兵衛という船宿に投宿。「此家ニ而少しドンタク、久々ニ而大井ニ愉快ヲ極メ」た。勤めから解放されしばしの休暇ドンタクを楽しむ金兵衛の姿がそこにあり、偶然部屋を同じくした長野の人と旅を語り合つたことと思われる。

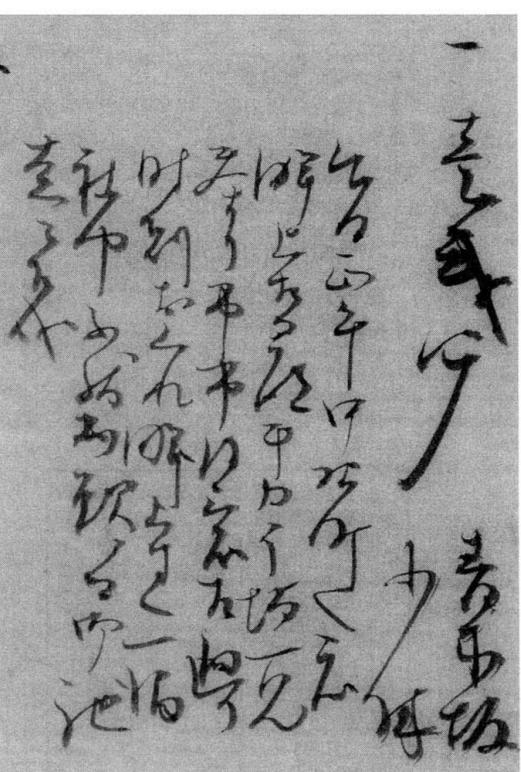
金兵衛の横浜への帰路は、順調でなかつた。大風によつて足止めされ桑名港から四日市に渡り、四日市港から出帆したのは二二日。が、東風で鳥羽に押し戻されてしまう(そのため伊勢神宮の参詣もかなつたのであるが)。無事船が出帆したのは二四日で、強い西風で翌日横浜着。金兵衛は日記の終わりを締めくつた。

### 金兵衛の足跡

この金兵衛の「年頭廻り」の足跡からたどることは、①佐久における生糸・人参荷主の掌握、②上田での為替方彰真社の準備情況視察、③北信および伊那、高山での器械製糸・生糸荷主の掌握、この三点であろう。とくに①③は、生糸荷主の獲得策に、製糸業発展の地域的違いをみてとることができる。すなわち、佐久は生糸荷主と薬種人参荷主とが兼業している段階にあり、器械製糸は興つていない。いずれも横浜で相場がたつ生糸・人参をあわせて集荷することで、生糸集荷をたしかなものとしている。北信と伊那の器械製糸は、中野、須坂の小田切、伊那の宮田、飯田の長谷川と、その地域でもともくに有力な器械製糸家を重点的に廻っている。高山では糸商が中心となつて器械製糸を建設することが

盛んで、そのため従来の組織である生糸改会社に依りつつ、糸屋・荷主の掌握につとめている。このように製糸業発展の差異に応じた対処を金兵衛の行動からうかがうことができるのであり、これが当時横浜市場でもっとも多くの生糸を扱つていた野沢屋の営業活動の最前線であった。

また金兵衛の行動日程は過酷ともいえ、店主茂木惣兵衛の規律の行き届いた面も感じる。金兵衛の「道中日記」は、野沢屋茂木商店の発展を解明するヒントを今日伝えている。(道中日記の所蔵者である鐸木實氏、須坂の製糸家の屋号につきご教示いたいた須坂市立博物館の小林宇壱氏に深く感謝いたします。また、この金兵衛の道中日記は、次回企画展示「横浜商人・繁栄の六〇年—野沢屋茂木商店とその人びと」でも紹介します。)(平野正裕)



明治9年5月25日中野町「キカイ場一見」の「道中日記」部分

# 新聞万華鏡⑤

## 明治初年の新聞販売店

読売新聞号外附録



明治初年の新聞販売店の経営内容が書かれた資料に、『平野弥十郎幕末・維新日記』（桑原真人、田中彰編著）があります。平野弥十郎は、文政六年（一八二三）、江戸浅草に生まれました。天保一四年（一八四三）に雪駄下駄商平野屋の入り婿になり、嘉永五年（一八五二）に土木請負人になります。その後品川台場、神奈川台場の築造を行い、新政府が樹立してからは、横浜の馬車道通の改修、洲干弁天社の移転、新橋・品川間の鉄道工事、札幌の道路建設などに携わります。横浜に滞在している時に知り合つたのが外務省に勤務していた子安岐（あき）と親しくなります。

子安岐は、明治三年（一八七〇）

四月本野盛亨（もとのもりみち）、柴田昌吉（しばたまさよし）と活版印刷所日就社を横浜に設立します。明治六年四月には同社を東京に移転し、翌七年一月二日『読売新聞』を創刊しました。一般大衆が読めるように漢字に振り仮名を振った、啓発目録とした新聞でした。販売に際しては、街頭販売というスタイルをとりました。当初はふるいませんでしたが、次第に部数を伸ばし、明治八年五月には発

前回は幕末から明治初年には、新聞が主に絵草紙屋や書店で販売されており、当時の書店は新聞の販売だけでなく、印刷も行なっていたということについてお話ししました。今回は、その後にできた新聞の専売店についてお話ししたいと思います。

明治初年の新聞販売店の経営内容が書かれた資料に、『平野弥十郎幕末・維新日記』（桑原真人、田中彰編著）があります。平野弥十郎は、文政六年（一八二三）、江戸浅草に生まれました。天保一四年（一八四三）に雪駄下駄商平野屋の入り婿になり、嘉永五年（一八五二）に土木請負人になります。その後品川台場、神奈川台場の築造を行い、新政府が樹立してからは、横浜の馬車道通の改修、洲干弁天社の移転、新橋・品川間の鉄道工事、札幌の道路建設などに携わります。横浜に滞在している時に知り合つたのが外務省に勤務していた子安岐（あき）と親しくなります。

子安岐は、明治三年（一八七〇）四月本野盛亨（もとのもりみち）、柴田昌吉（しばたまさよし）と活版印刷所日就社を横浜に設立します。明治六年四月には同社を東京に移転し、翌七年一月二日『読売新聞』を創刊しました。一般大衆が読めるように漢字に振り仮名を振った、啓発目録とした新聞でした。販売に際しては、街頭販売というスタイルをとりました。当初はふるいませんでしたが、次第に部数を伸ばし、明治八年五月には発

（上田由美）

前回は幕末から明治初年には、新聞が主に絵草紙屋や書店で販売されており、当時の書店は新聞の販売だけでなく、印刷も行なっていたということについてお話ししました。今回は、その後にできた新聞の専売店についてお話ししたいと思います。

行部数は一万部に達しています。

弥十郎は子安に任されて明治八年五月、赤羽川を境として芝金杉以南六郷川にいたるまでの地域の新聞販売を担当することになり、東京芝の田町に新聞専売店「芳文堂」を開きました。開業資金は二〇〇円でした。

五月一日の日記には、新聞売捌きの引き札（広告）を本社から一五〇枚取寄せ、持ち場内に配ったこと、新聞配達人には毎月給料を三円と配達高に応じて別に支給すること、配達人に洋服、笠等を支給し、本社と同様に鈴のついた黒塗りの配達箱を担がせて配達、小売をすることが書かれています。五月一五日に開業をむかえ、この時本社から新聞一二〇枚を受け取り、三人の配達人が一時までに全て販売したとあります。その後、六月中の新聞売高は一〇三〇枚、九月一日には売高は一日一〇〇〇枚に達したとあります。

明治九年には、子安に頼まれて大阪支店を設立、神戸や京都でも販売を開始しました。当時大阪では新聞販売店はほかに一軒しかなく、新聞配達人五人が揃いの洋服を着て黒塗りの箱に鈴を付け、大阪市中を歩いたので、人々が珍しがって家から出て見物したといいます。明治一〇年には販売高が一日一六五〇から六〇枚でした。

このように弥十郎が、明治一二年に芳文堂を譲渡し札幌へ向かうまでのことが書かれており、初期の新聞専売店の様子がつかがわれる貴重な資料です。

（上田由美）

### ▼展示

- (1)「明治のハイカラ写真館—日下部金兵衛とその世界」4/25(火)～7/29(日)
- (2)「横浜商人・繁栄の60年—野沢屋茂木商店とその人びと」(仮称) 8/1(火)～10/28(日)

横浜商人の繁栄の歩みを、生糸貿易で財を築いた野沢屋茂木惣兵衛とその周辺の人びとをとおして振り返ります。

(3)「東海道宿駅制度400年記念 開港場横浜と東海道」(仮称) 10/31(火)～1/27(日)

平成13年は、東海道に宿駅制度が制定されて400年にあたります。本展示は、これを記念して開催するもので、幕末から明治初年にかけての東海道を舞台にしたさまざまな事件を紹介します。

(4)「橋樹郡の近代—都市化する近郊農村—」(仮称) 1/30(水)～4/21(日)

東京・横浜の二大都市間にあって、特異な地域社会を形成していた「橋樹郡」の近代の歩みを、地域に残された豊富な資料で辿ります。

### ▼開館20周年記念講演会

- ▷日時 6月2日(土)、午後2時から3時30分まで(1時30分開場、2時開演)
- ▷会場 横浜市開港記念会館
- ▷講師及び演題 田中彰(北海道大学名誉教授)「近代日本の選択—大国主義と小

### 資料館より



新館2階に新設されたインフォメーションコーナー

ほど改装され、「インフォメーションコーナー」が新たに設置されました。企画展や講座・講演会などの催しものの案内のはか、書籍や複製資料もケースのなかで、分かりやすく紹介されています。

いちどご覧になってください。

### 臨時休館日等のお知らせ

展示設営及び燻蒸、資料整理のため、次の日は臨時休館させていただきます。なお、毎週月曜日（4月30日、9月24日、10月8日、12月24日、1月14日、2月11日を除く）は、通常の休館日となります。

展示室	4月24日(火)・5月1日(火)・7月3日(火)・7月31日(火)・9月25日(火)・9月26日(火)・10月9日(火)・10月30日(火)・11月27日(火)・12月25日(火)・平成14年1月4日(火)・1月15日(火)・1月29日(火)・2月12日(火)
閲覧室	上記のほか 5月31日(火)・6月26日(火)～6月29日(金)・8月31日(金)・10月31日(火)・11月30日(金)・平成14年1月31日(火)・2月26日(火)～3月1日(金)